

IV

専門的な視点から（夏季集中講座より）

本章においては、本センターで実施した夏季集中講座の内容を掲載しています。慶應義塾大学からの報告やシンポジウムで得られた専門的知見を通して、様々な視点から子供の自尊感情や自己肯定感について考えることができます。

「子供の自尊感情や自己肯定感を高める教育の推進について」

東京都教職員研修センター視聴覚ホール 平成23年8月11日（木） 参加者数 453名

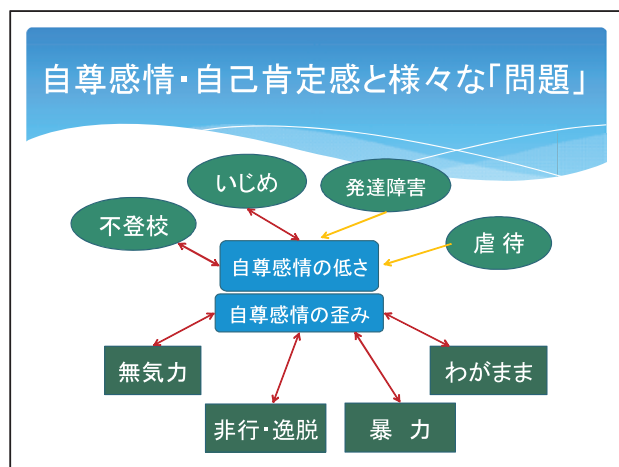
1. 心理学の視点から

講義 「自尊感情や自己肯定感に関する調査研究報告」

慶應義塾大学教職課程センター教授 伊藤美奈子 先生



1 自尊感情・自己肯定感と様々な「問題」



自尊感情や自己肯定感に関する調査研究に携わり3年目を迎えます。これまでに明らかになったことを御報告します。

私は、スクールカウンセラーとして子供たちと関わる中で、自尊感情や自己肯定感は、子供たちのそのときの状態と関係する要素だと感じています。自尊感情が低いことと「問題とされる行動」には、関連があると考えています。

例えば、不登校の子供の面接では、「どうせ私なんか」と、自分に自信をもてない子供が多く見られます。本当は「学校に行けるものなら行きたい」という気持ちはあるが「行けない」という現状に対して、自己否定的な言葉で語ることが多いのです。

さらに、いじめを受けた子供は、様々な形で自分を痛めつけられるという経験から「自分なんて生きている意味がない」、「自分は価値がない人間だ」と

思ってしまう、自己評価を下げることが多いのです。私が関わった学校でも、「自尊感情測定尺度（東京都版）」で調査を実施したところ、小学校5年生でいじめを受けていた子供は、結果の全てが否定的な方向に偏っていました。

発達障害が誤って理解されてしまい、自己評価を下げることがあります。例えば、その子供の障害について周りの理解がなく、「あなたの努力が足りない」、「集中していない」といったことを言われることによって、自己評価を下げってしまう現象です。発達障害のある子供は、人間関係をつくるのが苦手な傾向にあります。その結果、いじめなどの嫌な経験を受けることによって自己評価を下げることがよく見られます。これらは、発達障害の二次的な障害と言えます。

また、親によるネグレクトを受けている子供や家庭の中の様々な問題を抱えた子供が決して少なくないということも感じています。とても熱心に子供のために頑張っている家庭がある一方で、親の愛情をほとんど受けることなく、世話を十分されていない子供が学校に来られない状況や、そうしたことにより自己評価を下げってしまう子供が増えてきました。

学校でも、意欲がない子供や無気力な子供を見かけますが、いじめや家庭内の様々な悩みを抱えていることが原因となっていることがあります。

昨今、暴力行為が学校で増えているということを知りますが、そのような子供たちは、一見、強そうに見えますが、内面はとてももろく、弱い部分や悲しみを抱えている場合も多いのです。そういう意味では、強そうに見える子供の内面に潜んでいる自尊感情のゆがみも気になる現象です。

名古屋大学の速水敏彦教授が、「仮想的有能感」という言葉を作られ、人を見下すことで自分を保っているという若者が増えているのではないかと指摘しています。自分に自信がないが故に誰かを踏み台にして、「自分是可以する」、「自分は大丈夫」と何とか自尊感情を保っているのかもしれない。

2 自尊感情の定義

慶應義塾大学と東京都教育委員会で研究を進める中で、自尊感情について次のように定義しました。

「自分のできることできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者とのかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ち」

つまり、できる部分だけではなく、できない部分も大事にする。自己卑下するのではなく、「よくするにはどうしたらいいのだろうか」と考えることも自分の一つの部分であり、全てを含めた自分自身を、他者との関わり合いを通して「自分はかけがえのない存在だ」ということを感じる気持ちを自尊感情と呼んでいます。

自尊感情は、今まで心理学の研究ではよく使われてきた概念であり、あらゆる変数と関連が見られています。友達関係や学校適応、親子関係、やる気などの変数との関連を見ると、プラスの要素と相関があります。自尊感情とマイナスの要素とは、必ず負の相関があります。そういう意味で、子供たちの「生きる力」を支えるベースになる概念であると考えられます。

3 自尊感情は高ければ高いほどよいのか

この研究を始めた当初、学校の先生から、「自尊感情は高ければ高いほどよいのですか」という質問を受けました。先ほどの「仮想的有能感」の例からも分かるように、「自分を評価する」ということだけでなく、もう少しそれに要素が付け加わらないと、健全な形にはならないのではないかと考えています。

そこで、自尊感情が、うぬぼれや自己中心性、わがままというマイナスの要素にならないためには、何が重要かということで、次の3点を考えました。

- ① 人との関係の中に開かれていること
- ② 社会とのつながりの中に開かれていること
- ③ 現在だけでなく、将来にも開かれていること

開発した「自尊感情測定尺度（東京都版）」では、「A 自己評価・自己受容」「B 関係の中での自己」「C 自己主張・自己決定」の3つの観点で多面的に自尊感情を捉えるようにしています。

4 自尊感情と発達段階

小学校5年生から高等学校3年生までを対象に行った調査から自尊感情の傾向を見ると、学年が上がると「A 自己評価・自己受容」の得点は、低下の傾向が著しくなります。小学校5・6年生から中学校1・2年生にかけて低下し、中学校3年生から高等学校1年生で若干盛り返しますが、また、高等学校2・3年生で若干低くなります。これについては、日本だけでなく世界の自尊感情に関する多くの研究を概観しても、大体、思春期は自尊感情が低下していくという結果がほぼ共通で見られます。

発達的な変化を生む背景要因について考えてみると、小学校高学年くらいから、様々な変化が見られるようになります。一番大きい要因としては、自己意識の変化が挙げられます。自分のことを振り返ったり、客観視したり、他人と比べたりすることによって自分が見えてきます。自分のよいところも見えてきますが、自分がないところや、人はできるのに自分にはできないところが気になり、自分のことを「駄目な人間だ」と悩んでしまうことが多くあります。嬉しい時は、自分と向き合うことは少ない一方、「今日は、うまくいかなかったな」、「失敗したな」とい

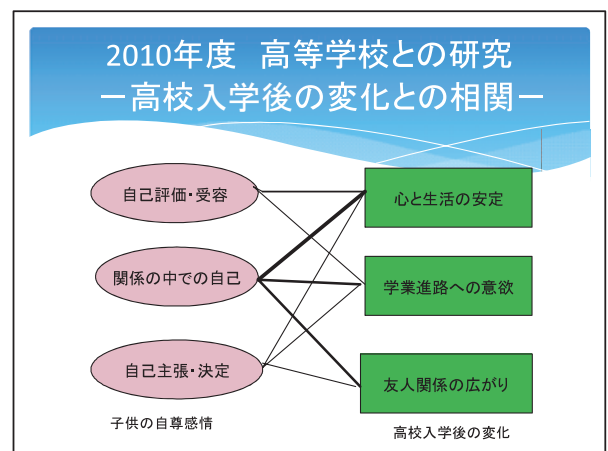
うときが、自分をしっかり見つめる機会になります。その結果、自分のマイナス面や、人と比べて足りないところ、劣っているところが気になってしまうと考えられます。同時に、思春期には他者への意識も高まります。他者というのは、多くの場合は友達、親、先生などであり、自分にとって大切な他者の評価に振り回されてしまうのも、この時期の特徴です。

また、学業成績も学年が上がるにつれて、明確に示されるようになります。部活動でも、メンバーに入れるかどうか、人と比べて上手か下手かということがはっきりと見えてきます。そういう結果から、自分は駄目だと思い自己評価を下げる経験がどんどん増えていくということもあるでしょう。同時に、幼少期の間に非現実的な夢や理想を抱いていたのが、小学校後半から中学生・高校生になると、より現実的な夢をもつようになります。その結果、今の自分とのギャップが見えてきます。それを一つのパネにして努力につながることもあります。そのギャップが大きすぎると落ち込んでしまうこともあります。また、小学校後半くらいから、親など周りのプレッシャーにつぶれていく子供たちが現れてきます。

このように、小学校から中学校にかけて、発達段階上のこうした変化が一度に訪れ、その結果、自尊感情が下がってくるのではないかと考えられます。

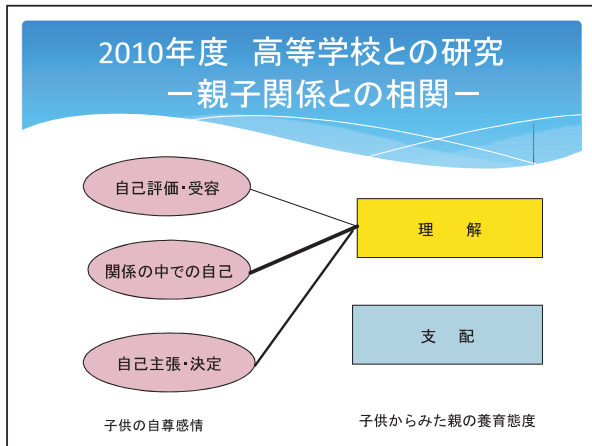
5 自尊感情と関連の深いもの

(1) 自尊感情と学校適応



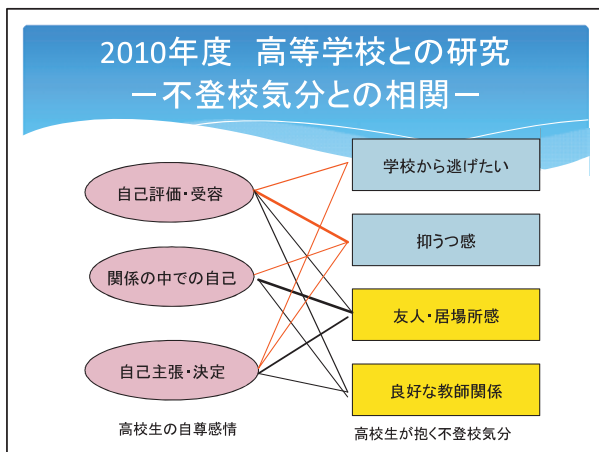
2010年度、高等学校で「A 自己評価・自己受容」「B 関係の中での自己」「C 自己主張・自己決定」という3観点と、高等学校入学後の心と生活の安定、学業や進路への意欲の向上、友達関係の広がりという学校適応に関する3得点との関連を調べました。得点間を線で結んでいるところは、関係があると解釈します。線の太さは関係の強さを表していますが、ここでは関係の強さではなく、どこが線で結ばれているかに注目します。すると、自尊感情と学校適応がかなりの強さで関連をもっていることが分かります。つまり、学校適応がよい、学校に来て安定したい、勉強に対する意欲があるし、友達関係も広がった、というよい生活を送っている子供たちは、やはり自尊感情の3観点の得点は、高いということがこの結果から予測できます。

(2) 自尊感情と親子関係



ここに挙げた親子関係というのは、子供が評定した親の特徴です。「理解」というのは、親が自分のことを理解してくれている、分かってくれている、親が自分の支えだと子供が思っている状態を表しています。「支配」は、親がうるさく口出しをする、自分のことに構いすぎると感じている状態を表しています。これを見ますと、これまで「理解」というのは親子関係のプラスの要素、「支配」というのはマイナスの要素だと思っていたのですが、それほど単純ではないことが分かります。親に理解されている子供ほど、自尊感情が高いというのは明らかに見えてきましたが、「支配」については関係がありませんでした。親は、子供のことは気になり、いろいろ口出しをしがちになりますが、それは自尊感情には直接影響しません。それよりは、親が「理解してくれている」、「分かってくれている」と子供が感じるものが自尊感情の高さにつながっていくということが分かります。

(3) 自尊感情と不登校気分



「学校から逃げたい」、「抑うつ感」は、不登校気分です。「友人・居場所感」「良好な教師関係」はプラスの側面です。これら4得点と自尊感情の3得点との関連を見ると、不登校に関する不登校気分や抑うつ感が強いほど、自尊感情は低くなります。一方、友人関係、あるいは教師関係がよい子供たちほど自尊感情は高いと従来から言われていますが、その結

果がここでも確認されました。(赤の線はマイナス、黒の線はプラスの関係を表す)

以上(1)から(3)までをまとめると、自尊感情の3観点の得点は、学校や家庭における適応、具体的には、子供にとって居場所があるという感覚とはとても関連が強いということです。つまり、自尊感情の得点が高いということは、子供が生きていく上で重要なことだということが分かります。自尊感情が高いほど、学校の適応、居場所感が良好で、親には理解されていると感じている子供が多いです。さらには、不登校傾向も少ないということが確認できました。

6 各発達段階における子供が求める親の在り方

自尊感情を高めるには親子関係はどうあればよいのかという点については、発達段階により子供たちが親に求めるものが多少変わるのではないかと思います。

生まれて間もない乳幼児期から幼稚園くらいまでは、自分を育ててくれる親や養育者に対する愛情、基本的な信頼関係を養育者との間に築けることが大切だとよく言われます。だから「愛して」という気持ち前面に出てきます。

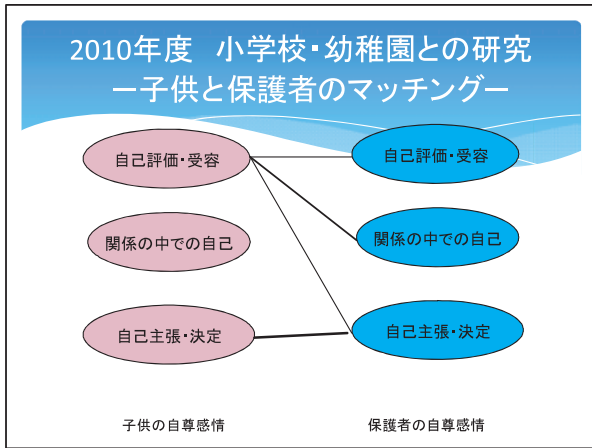
小学生になり、勉強が始まり、できる・できないというところに立たされることが多くなると、「褒めて」という気持ちが子供の心の中を大きく占めてくるのではないかと思います。

中学生、高校生、大人も褒めてもらえるのは嬉しいが、思春期の子供は、素直に褒められることを受け止めにくい年代です。そういう時には、「褒めてほしい」というよりは、「分かしてほしい」、あるいは自分のことを「認めてほしい」と、発達段階とともに変わるのではないかと考えられます。

7 自尊感情の3つの観点のバランス

自尊感情の3得点から8つのタイプを抽出してそれぞれの特徴を分析しました。その結果から、3得点すべてが高いということは大切ですが、3観点の得点のバランスも大切だということが分かりました。例えば、「C 自己主張・自己決定」の得点だけがなくて、「A 自己評価・自己受容」または「B 関係の中での自己」が低いという三角形を示す子供の特徴を調べてみると、教師との関係があまりよくない、自己主張や個性を発揮するということが得意な一方で、自己中心性やわがままなところが見えるということが分かってきました。このようなことから、3得点が高いことと同時に、3得点のバランスも大事であると言えます。

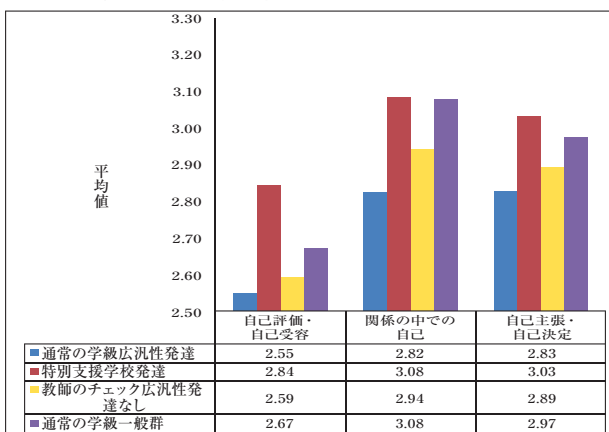
8 保護者の自尊感情と子供の自尊感情



子供と保護者の両者に自尊感情の調査をし、それをマッチングさせて両者の関係を見るという方法で調査結果を分析しました。

アメリカ合衆国の研究では、子供の自尊感情と母親の自尊感情はとても関連があるという結果が多かったのですが、今回の調査からは明確な関連は出ませんでした。子供の「A 自己評価・自己受容」の得点は、やはり親の自尊感情の3得点と関係があり、親の「C 自己主張・自己決定」と子供の「C 自己主張・自己決定」は関係が見られましたが、それ以外のところは、有意な関係は見られませんでした。この結果からは、先行研究で言われたような、親と子供の自尊感情は関係するという明確な結論ではなく、親子の自尊感情の得点は、弱いながらも部分的には関係するということが伺えました。このことから、子供の自尊感情が全て親の責任とは言えませんが、親が元気になる、親が自信をもつことが、子供の自尊感情や自己肯定感に多少なりとも影響するということが示唆されました。

9 発達障害と自尊感情



データが限られており、今回の結果を一般化するのは難しいですが、4群に分けて自尊感情の結果を示してみると、有意な差が見られました。

青い棒で示した群は、通常の学級に在籍する広汎性発達障害のある子供です。診断を受けている子供だけでなく、先生方にチェックリストで調べてもらうことで、広汎性発達障害の疑いがあると判断した

子供も含まれています。赤い群は特別支援学校に在籍する子供、黄の群は、発達障害があるとは言えないけれども、学校の先生方から見て気になる子供、紫の群は、以上に該当しない子供の平均値を示しています。

これを分析した結果、4群に差がありました。先生方にどのような点が気になるかということをチェックリストで調べてもらうと、発達障害のある子供は様々な問題傾向を示しており、特別支援学校にいる子供の障害の程度は、通常の学級の子供たちよりも重いことが確認されました。しかし、自尊感情の得点は、特別支援学校に在籍している子供の方が高くなりました。通常の学級に在籍する広汎性発達障害のある子供の得点が最も低いという極端な結果が出ました。これについては、慎重な読み取りが必要であり、これだけをもって通常の学級の発達障害のある子供たちは自尊感情が低くて、特別支援学校の発達障害のある子供たちは自尊感情が高いとは簡単には解釈できませんが、一つの可能性として考えたいと思います。私が臨床の場に携わっていて感じるのは、発達的な問題を学校にも親にも理解してもらい、比較的早期からきちんとした関わりを受けている子供たちの自尊感情はそれほど低下しません。逆に、周りに理解してもらえず、いじめられたり、叱られたりしてしまうような経験を積んだ後に自己評価が下がっていくという、二次的な障害として自尊感情の低下を示す子供たちが多いということを感じています。

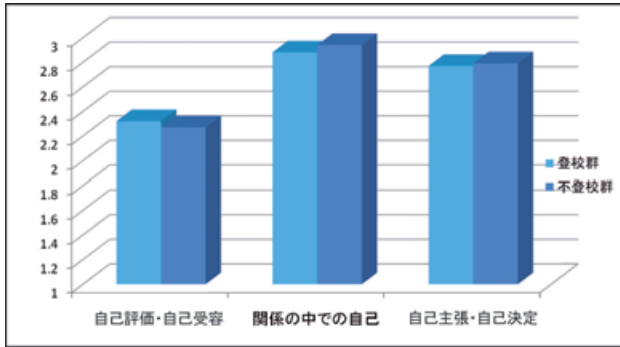
一方、特別支援学校は、障害のある友達が多いことから、自分だけが違う、自分だけができないという状況はあまりありません。ただ、特別支援学校の子供たちの得点があまりにも高かったので、自分のことを客観的に見ることができない子供たちも含まれているのではないかとすることも考えられます。自己評価で評定する質問紙では、本当の気持ちとは異なることを書くこともできる、あるいは分からないなりに回答してしまうことができます。その答えだけをもって、この子供はこうだと決めつけてはいけないということも感じます。子供たちの自己評定に頼らない、先生方が子供の行動特性や、様々な外見から分かるところでチェックできる評価シートが必要で、教職員研修センター、研究協力校とともに本研究で現在作成しているところです。(開発した「他者評価シート」は、32～33ページ参照)

10 不登校経験と自尊感情

東京都ではチャレンジスクールなど様々なタイプの高等学校をつくり、不登校経験者が高等学校に進学できる環境を整えています。

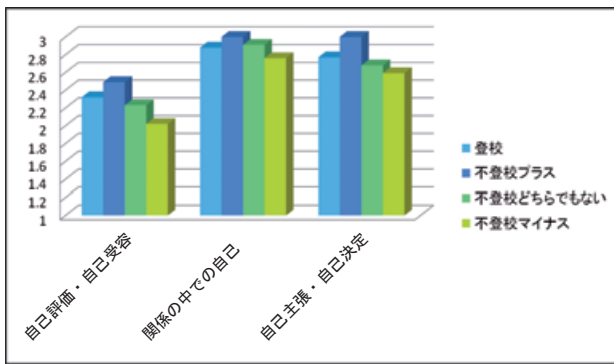
中学校のときに不登校だった子供が、その後どうなっているのか、そのことを明らかにするため、チャレンジスクールの一つに協力してもらい、自尊感情の調査を行いました。

(1) 不登校経験者と未経験者との差異



中学校での不登校経験の有無で比べると、高等学校に入ってからの自尊感情の得点に差はありませんでした。

(2) 不登校経験別自尊感情の得点

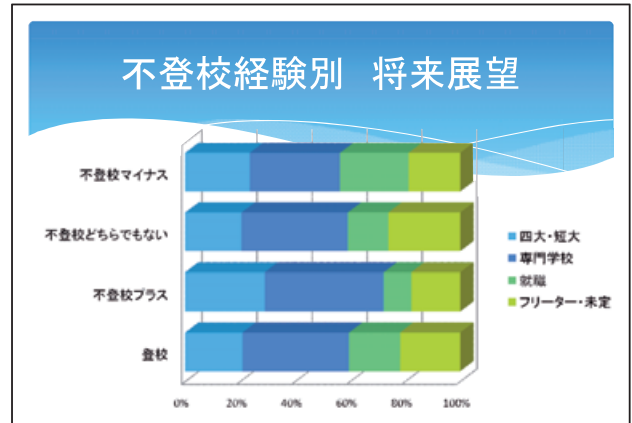


中学校のときに不登校ではなかった「登校」群、不登校でしたが、現在その不登校のことをプラスに考えているという「不登校プラス」群、どちらでもないと考えている「不登校どちらでもない」群、不登校のことをマイナスであったと今思っている「不登校マイナス」群、以上の4群に分類しました。

そうすると、自尊感情の3得点ともに一番高かったのが「不登校プラス」群、一番低かったのが、「不登校マイナス」群でした。つまり、不登校であったことが現在の自尊感情を決めるのではなく、現在、自分が不登校だった経験をどう捉えているかという過去の捉え方により、自尊感情の得点が変わってくるということが分かりました。

不登校というその子供の「過去」が、その子供の自尊感情を決定するのではなく、その子供が高等学校に入ってからの「現在」を肯定しているかどうかということの方が「過去」の捉え方を変えることにつながります。現在、自分は高等学校に入って頑張っている、自分には居場所が見付かった、自尊感情も上がった、そういう現在の在り方が変わること、過去の自分に対する評価が変わるということです。私たちは、面接をするときに、過去に何かがあって今がつくられているということをしっかり聞くような訓練を積んできましたが、この結果は、今の状況が過去に対する見え方や考え方を変えることもできることを示唆しています。

(3) 不登校経験別の将来展望



不登校経験別に分けた4群に、将来展望を尋ねました。将来どのような進路に進みたいか、4年制の大学に行きたい、短期大学に行きたい、専門学校に行きたい、就職したい、フリーターまたは未定、という選択肢で答えてもらいました。4年制の大学と短期大学を一つにし、フリーターと未定を一つにして示したのがこのグラフです。大きな差は見られませんが、「不登校プラス」群に注目すると、他の3群に比べて、4年制の大学とか短期大学に行きたいという回答が多くなっています。逆に、フリーターまたは未定という回答は少なくなっています。その結果、現在を肯定し、過去を受容する、過去を受け止める、プラスに捉えるということ、将来の見え方も変わってくるということが見えてきました。これは見方を変えれば、将来への展望をもつことで、今の在り方、今の頑張り方、今の過ごし方が変わる可能性があるとも考えられます。過去が今をつくり、今が将来をつくと私たちは考えがちですが、もしかしたら、将来をどう展望するか、どのような夢をもって、どのような理想を描くかによって、今の在り方、今の生活、今の見え方、さらには過去に対する捉え方まで変わるのではないかとということがうかがえます。

11 自尊感情の日本・中国及び日本・韓国比較 (92～94 ページを参照)

12 今後に向けて

今後、特別支援学校等での活用を考えた先生方が評価できるシートを作ろうと考えています。(開発した「他者評価シート」は32～33ページ参照) また、9月には自尊感情と規範意識、家庭要因の関連を見る調査を実施する予定です。得点から見える特徴と、本当の姿が合致しない場合もあるかもしれません。その得点の読み取りについては、得点だけが一人歩きしてはよくないと思っています。さらに、得点そのものが変わらないものではなく、関わりによって変わっていく可能性をもっているところから考え、学校でも協力していただき、子供たちの実際の行動面の変化、実際の学校で見られる姿の変化と、その得点の変化との合致を、個別の事例にも注目しながら考察を進める必要があると考えています。

「子供の自尊感情や自己肯定感を高める教育の推進について」

東京都教職員研修センター視聴覚ホール 平成23年8月11日（木） 参加者数 453名

2. 幼児教育、人権教育、医学、特別支援教育などの視点から シンポジウム 「子供が将来への夢や希望をもてるために ～様々な視点から子供の自尊感情や自己肯定感を考える～」

司会 東京都教職員研修センター研修部教育開発課 統括指導主事 青木由美子

シンポジスト 元 桜 美 林 大 学 教 授 井上千枝美 先生

立川市立南砂小学校副校長 高田 幸男 先生

筑波大学名誉教授 福田 弘 先生

帝京大学教職大学院教授・小児科医 藤井 靖史 先生

東 洋 大 学 教 授 宮崎 英憲 先生

● 子供が将来への夢や希望をもてるために

本年度のシンポジウムは、教育、医療等の専門家の皆様をお招きし、様々なお話を伺いながら、シンポジストと会場の皆様とが一体になり「子供たちが将来への夢や希望をもてるために、私たちが今できること、明日からできることは何だろう」ということを考え、共有するという趣旨で進めました。

● 自尊感情と自己肯定感をどう考えるか

シンポジストには、シンポジウムの前に行われた研究報告と講義を踏まえ、専門的な立場から「自尊感情と自己肯定感をどう考えるか」をお話ししていただきました。井上先生には幼児教育、高田先生には小・中学校、福田先生には人権教育、藤井先生には教育と医療との連携、宮崎先生には特別支援教育、とそれぞれの専門の視点からお話ししていただきました。

● 幼稚園、学校、家庭、地域への期待

本研究を踏まえ、幼稚園、学校、家庭、地域などへ期待することをお聞きしました。それぞれの先生方から、学校へ期待すること、地域、家庭へ期待することなど具体的な提案がありました。提案の後、会場から、子供たちが将来への夢や希望をもてるために、今できること、明日からできることなどの意見や研究協力校からの取組事例が紹介されました。

終わりに、樋口豊隆教育開発課長から、まとめとして「子供のマイナス面が浮かんできたときに視点を変えたらよさにつながるということを考えていただきたい、自尊感情を高める実践というのは日常の中にあるということを考え、家庭・学校・地域それぞれの立場で実践していただきたい」というメッセージを参会者の皆様に送り、シンポジウムを閉じました。



◆ 幼児教育から

集団の中で光る個性を育てる

元桜美林大学教授 井上千枝美 先生



自尊心を高める上で大切なポイント

- ・ 幼児期から自分への自信を育てる。
- ・ 幼児の自己評価は、保育者や友達による肯定的な評価が支えとなる。
- ・ 遊びや生活の姿を見て、その記録から傾向を把握する。
- ・ 自尊心や自己肯定感は家庭とのつながりの中で育てていく。

◇ 自尊心や自己肯定感をどう考えるか

第一点は、本研究は小学校以降の問題ではなく、人格形成の基礎を培う幼児期から、自分への自信をしっかり育てていく必要があるということです。このことについては、平成21年度実施の幼稚園教育要領にも「集団生活の中で幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること」という一文が新たに入っています。

第二点は、幼児の自己評価は、保育者や友達という他者による肯定的な評価が支えとして必要であるということです。幼児は一般的に自分を客観視することが難しいので、他者の評価によって自分を評価する傾向があります。

第三点は「自己評価シート」のことです。幼児教育は遊びを通して総合的に指導することを重視しています。「自己評価のシート」を踏まえながらも22項目に縛られず、幼児の遊びや生活する姿から幼児を丸ごと徹底的に見て、その記録から傾向を把握する必要があると思いました。現場では、今、チェック項目がたくさん出ています。シートでチェックするだけで理解したつもりになったりその項目以外の姿が見えにくくなったりする傾向があります。

最後に第四点ですが、幼児教育は保護者との連携が不可欠です。親から理解されていると感ずることが子供の自尊心と大きく関連しています。自尊心や自己肯定感の育成は、幼稚園の中だけで考えるのではなく、家庭とのつながりの中で育てていくことが大切です。これまで以上に家庭・地域への啓発の工夫を考える必要があると考えます。

◇ 幼稚園、家庭、地域に期待すること

第一点は、当たり前のようにですが、集団の中で光る個性、一人一人の個性を育ててほしいということです。みんな違ってみんなよい、それを学級経営の基本に置いて幼児理解を深め、一人一人の特性を伸ばす援助を心掛けてほしいと思います。

第二点は、友達関係をしっかり育てることです。友達のよさを認められるようになると、他者との比較の上での自信ではなく、自己達成感による自信をもつことができ、他者を認める余裕と同時に、自分の失敗を認める余裕も生まれてきます。肯定的な自己を認識するようになるには、日頃から友達関係をしっかり育てていくことが必要です。

家庭へ期待することとしては、幼児期の発達を踏まえた子供との対応に期待します。家庭が子供にとって心の居場所になり、ほっとできる、安心して生活できることが大事だと思います。自分は家族から愛されている、自分の居場所がある、役に立っているというような実感がもてるよう、それを実際に子供に「言葉」で示してほしいと思います。そうすれば所属欲求や愛情欲求が満たされます。

また、乳児期には肌を離さず、幼児期には手を離さず、児童期には目を離さず、思春期には心を離さずと言われます。離れていても自分を見守ってくれる親がいるということは、子供が自己受容することができます。困難に出会ったとき、挑戦する力も、挫折にくじけない力もここから生まれます。

● 幼稚園、家庭、地域への期待

- ・ 幼稚園への期待として、一人一人の個性を育て、友達関係を育てること。
- ・ 家庭への期待として、家庭が子供にとって心の居場所となり、ほっとできる、安心して生活できることになってほしい。自分は、家族から愛されている、役に立っているなどの実感がもてるよう実際に子供に「言葉」で示してほしい。

◆小・中学校から

共に育てていく姿勢が大切

立川市立南砂小学校副校長 高田 幸男 先生



自尊感情を高める上で大切なポイント

- ・成功体験や達成感を味わえるような環境、居場所づくりが必要である。
- ・道徳の時間は、自分自身の内面を見つめ、自分のよさを導き、自分自身を考えることにつながる。
- ・友達との関係、教師と共に過ごす時間が大事である。

◇ 自尊感情や自己肯定感をどう考えるか

中学校での教員経験からも学校の中で自尊感情を育てるには、成功体験をさせたり、達成感を味わえるような環境づくりをしたり、いじめをなくすような居場所づくりを行ったりすることが必要だと思います。

具体的には、総合的な学習の時間の体験活動に加え、道徳の時間が大事であると考えています。道徳の時間は教育活動を補充、深化、統合する大切な時間です。子供たちがいくつかの項目のそれぞれの価値について深めていく中で、自分自身の内面を見つめ、これが自分のよさを導き、自分自身を考えることにつながってくるのではないかと思います。一つ一つのいろいろな活動を深めるためにも、道徳の時間の中で子供たちが自分自身のことを見つめるだけでなく、友達との人間関係、そして教師と共に過ごす時間が大事なのではないかと考えています。

子供たちは、周りの声や行動やいろいろな反応に敏感です。その中で自分が認められる時間をもてることは、大変素晴らしいことだと思います。中学校での子供たちの様子としては、生徒自身にもものすごく変化がある3年間であり、表現することが苦手、自分はこうありたいと思ながらもなかなかうまく表現できない子供たちがたくさんいます。

小中連携という視点でも、学年が進むにつれて低下していく自尊感情についてどのように対応していったらよいかと考えながら、実践していきたいと思っています。

◇ 学校、家庭、地域に期待すること

家庭や地域に期待することとして、子供に自分が大切に思われているということがとても大事なことだと思います。子供たちが様々な問題にぶつかったときに、特に小学校では担任が一人で問題を抱えてしまうということが多いのですが、担任が抱えてしまっただけではいけないと思います。保護者に対して、学校や家庭、地域で共に育てていくという姿勢を、積み重ねていくことが大事だと思います。それには、組織として様々な問題を解決していくことが大事です。問題によっては、サポートチームで対応することも大切だと思っています。

学校が考えねばならないこととしては、子供のために精一杯やらなければいけないということです。これは、教師としての基本であります。難しいことがあったときには、様々な協力を得ることによって変わっていくことができることを実感しています。一日の多くの時間を過ごす学校の中では、子供たちが「信号」を出してきたときに、教師はそれを見逃さないということ、子供たちが抱えている問題とは何かということを考え、子供たちのことを教師全員で見えていくことが大事だと思います。

学校や家庭、地域、その子供に関わる人たちがみんなで見守ってあげることがやはり大事なことです。子供はそういう目で自分を見守ってくれる大人がいるということで、安心して生活し、自尊感情も形成されていくのだと思います。

◎学校、地域、家庭への期待

- ・子供に自分が大切に思われているということを実感させる。
- ・学校、家庭や保護者が、共に育てていくという姿勢をもつ。
- ・学校や家庭、地域、その子供に関わる人たちがみんなで見守ってあげる。

◆人権教育から

自他を尊重すること、それは生まれながらにもっているものではない

筑波大学名誉教授 福田 弘 先生



自尊心を高める上で大切なポイント

- ・自分の人権、他者の人権を実現するためには、自分を適切に、前向きに評価でき、受け入れられなければいけない。
- ・自尊心は、他者への尊敬というものと対になって問題にされなければいけない。
- ・自尊心と他者を尊重し尊敬すること、これは車の両輪である。

◇ 自尊心や自己肯定感をどう考えるか

自分の人権、他者の人権を実現するためには、自分を適切に前向きに評価でき、受け入れられることが大切です。ここに自尊心というものが関わると思います。ただ、自尊心というものは、それだけを切り離して問題にしてはならないと考えています。つまり、人権尊重を実現するためには、自らを価値ある人間、存在として、前向きに捉えることと同時に、同じ社会に生きる、あるいは国境を越えた地に住む人々を含む他者の人格、人間としての尊厳、価値を尊重できなければなりません。そこで、自尊心は、他者への尊敬というものと対にして問題にされなければいけないということが非常に重要だと思っています。

自尊心の三要素を抽出して考察し、全体の高さのみではなくてバランスも重要であるとの指摘がありました。また、発達段階との関連において、大変な問題状況がある場合に対応しなければいけないことや、保護者自身の自尊心の現状が、直接的とまでは言えないまでも、子供の自尊心の発達に影響するという相互関係にあることは確かだという指摘などがありました。これらのことは、自尊心と他者を尊重することとは車の両輪のような関係にあると考える立場からすると、非常に注目すべき研究成果であると受け止めています。

◇ 学校、家庭、地域に期待すること

子供には、他者に好意的に接し、他者の喜びを自分の喜びとするような好意的な面があると思います。そうした人間的な感情や能力を素直に伸ばすためには、親や教師が本気になって人間としての子供を愛し、受け入れ、育むことが大事です。他方で、子供は自分の利益だけを求める我欲的側面ももっています。こうした欲望を適切にセルフコントロールし、他者をも自分と同じ人間として尊重できる力は、親や教師や周りの大人が折々にきちんと教育的に関わる中で初めて育つものだと考えられます。

人間がもつこの両面性を理解し、愛をもって適切に子供に関わっていくのが親や教師や大人の責任ではないでしょうか。私たちは子供の将来や人間としての成長を展望し、今この子供にどう関わるのが本当に愛することになるのかを考える必要があります。ペスタロッチが主張したように、親の愛も教師の愛も、感情的な愛にとどまらず、「思慮を伴う愛(thinking love)」にならなければならないでしょう。子供の将来を展望しつつ、必要なときには、愛するが故に「止めなさい」と指導できる本物の愛です。愛と規律もまた、車の両輪だと思います。

「他律から自律へ」といかに適切に教育するかが今日の大きな課題です。子供を独立した人格をもつ存在として捉えて、自分を本当に愛すると同時に、他者をも平等である人間として尊重することができる自律的な人になれるための一要素こそ、自尊心の育成であることを確認したいと思います。

●学校、地域、家庭への期待

- ・親や教師が本気で人間存在としての子供を愛し、受け入れ、育む。
- ・他者も自分と同じ人間として大事にすることは、後天的に親の愛育、教師の教育を通して、育ってくるものである。
- ・親も教師も感情的な愛にとどまらず「thinking love＝思慮を伴う愛」を大事にする。

◆ 教育と医療の連携から 「ありがとう」という言葉かけを大切に

帝京大学教職大学院教授・小児科医 藤井 靖史 先生



自尊心を高める上で大切なポイント

- ・ 自尊心は、他者との関係で捉える必要がある。
- ・ 「周りの人は自分を理解してくれている」と感じられることが大切。仲のよい友達ができると、子供たちは生き生きして様子が変わる。

◇ 自尊心や自己肯定感をどう考えるか

第一点は、自尊心は、他者との関係で捉える必要性があるということです。

第二点ですが、私たち医学関係者の方から働きかけなければいけないことがあるということです。学校の中で発達障害のある子供の自尊心の低さの話題が発表にもありましたが、先生方が気付かれにくい発達障害が実は非常に多いと思っています。私が学校に伺って、「このお子さんはおとなしくて他の子に迷惑をかけないかもしれないけれど、発達障害があります」ということを先生方にお話することがあります。そうすると先生方から、考えてもみなかったと言われる場合があり、私たちの方から行動しなければいけない点であると思っています。

先ほどの発表の中で、特別支援学校の発達障害のある子供たちの自尊心が高いということについて、周りの人たちが自分のことを理解してくれているからではないかと伊藤先生が解釈をされていました。このことについて、私も全く同感です。通常の学級から特別支援学校や特別支援学級に行って、仲のよい友達ができると子供たちは生き生きして様子が変わると保護者の方からよく聞いています。

◇ 学校、家庭、地域に期待すること

第一点は、本研究で自尊心や自己肯定感を3つの視点で捉えてグループ化し、個人の特徴を明確にしようという試みは安易にタイプ分けすることへの注意も怠らないいただきたいということです。これにこだわりすぎずに、子供自身を見る視点を忘れずにいていただきたいと思っています。

第二点は、子供の発達段階に合わせて指導を変えていくということです。

第三点は、成功体験と失敗体験のバランスを保つことがとても大切ということです。

保護者の方への期待ですが、保護者の方には、ぜひ先生方に大いに期待していただきたいと思います。それから、先生方を認めてもらいたいということが私からのメッセージです。「学校の先生は分かってくれない」という保護者の訴えがありますが、逆に学校での子供たちの活動を保護者が分かっていないということもあります。集団の生活の中で子供を見る目というのは、やはり学校の先生が一番確かなので、その部分で尊重していただきたいと思います。一方で、家庭での様子やその子供の成長過程というのは保護者が一番知っているのですから、先生方はその部分は保護者にしっかり確認していただきたいと思います。先生方がその部分は保護者に頼っていただくということ、互いがその部分を大切にすることが保護者と先生方の信頼関係ができる秘訣なのではないかなと思います。

最後に、指導資料【基礎編】66ページにもありますが「ありがとう」という言葉掛けをしてください。「ありがとう」という言葉掛けをすることがよいのではないかという提案です。

● 学校、地域、家庭への期待

- ・ 自尊心の3つの視点で捉えたタイプにこだわりすぎずに、子供自身を見る目を忘れずにいてほしい。
- ・ 子供の発達段階に合わせて、指導を変えていく。成功体験と失敗体験のバランスを保つ。
- ・ 保護者と先生方の信頼関係が大切である。
- ・ ありがとうは「Thank you.」それに対する答えは「You're welcome.」welcomeは相手を受け止めているというニュアンスがある。

◆ 特別支援教育から

「セルフエスティーム」に込められた意味をもう一度捉え直す

東洋大学教授 宮崎 英憲 先生



自尊心を高める上で大切なポイント

- ・ 自尊心をマイナス向きにしないために、高ければいいということではなく、バランスよくしていくことが大切である。
- ・ 幼児期のように発達の段階が未熟な時期では、自己肯定感の基礎にある自己概念の形成がポイントとなる。自己概念の発達を支援するという視点を大切にする。

◇ 自尊心や自己肯定感をどう考えるか

第一点は、自尊心や自己肯定感の大切さについて、私たちが子供たちに期待する「生きる力の支えの部分」を、どのように学校でつくっていくかを考えていかなければいけないということです。そういう点では、自尊心は高ければよいということではなくバランスよくというお話がありましたので、教育活動の在り方を今後さらに追究していかなければいけないと思います。

第二点は、幼児期のように認知や思考発達段階が未熟な時期では、自己肯定感の基礎にある自己概念の形成が一番ポイントになるということです。自分の性格や能力、身体的な特徴、そういったものを自分の意識として作り上げていく過程が重要であり、そこがきちんと整理されていなければいけない。この点から考えると、幼児期や小学校低学年の時期にどのように学習していくかを、今後さらに追究する必要があります。その視点からもう一度、自己概念を組み立て直す必要性があるということが二点目です。

第三点は、自己概念の発達を支援するという視点がこれまでの特別支援教育の中に十分あったかどうか。好き嫌いといったような自我の感情のところからプラスして教育活動を展開していく視点で考えると、幼児期の自己中心性を否定的に捉えるのではなく、発達の視点から非常に重要なものと捉えることを、十分教育活動の中に入れて、自尊心とか自制心を作り上げていく教育活動を今後行っていく必要があるだろうと考えます。

◇ 学校、家庭、地域に期待すること

第一点は、教員の子供を理解する力量を高めていく。「セルフエスティーム」という言葉に込められた意味を、もう一度考える必要があると考えます。その意味の背景としては、自分と他者との関係が置かれていかなければいけないという問題を子供理解の視点からもう一度大事に考えていくということが必要だと思います。

第二点は、特に発達障害児の支援という観点において今回の学習指導要領で校内委員会の整備ということが重視されていることです。例えば、専門家チームを各区市町村教委で位置付ける、関係機関との連携を図る、医療関係者との連携を図るなど、様々な関係機関とつないで子供を見ていく視点を広げることです。また、どのように支援を進めていけるのかという仕組みも同時につくらなければいけないということです。担任の先生が一人で悩まない仕組みを校内で作っていただくことが必要であると思います。

保護者の皆様にはお願いですが、保護者は先生方よりもっと上手に「つきあって」いただきたい。また、担任の先生は保護者を大事にしてほしいと思います。保護者の言うことを受け止められる担任の先生は保護者の味方になります。それが校内で特別支援教育の体制を整備するときに、そのことも念頭におきながら、研究の次のステップに踏み出せると思います。背景を整理しながら進んでいかなければならないと思います。

● 学校、地域、家庭への期待

- ・ 教師が子供を理解する力量を高めていくために、セルフエスティームに込められた意味を考える。
- ・ 校内委員会の整備など担任の先生が一人で悩まない仕組みを校内で作る。
- ・ 保護者、教師が互いに相手を受け止められる信頼関係をつくることが大切である。